

1516-1534年のフィレンツェにおけるミケランジェロの群像表現

——《サムソンとペリシテ人》再評価——

新倉 慎右(慶應義塾大学)

《ダヴィデ》の対作品計画が1527年のフィレンツェ共和国の樹立に際して再燃したとき、ヴァザリーの伝えるところによれば、ミケランジェロは3体の人物像を組み合わせた「サムソンとペリシテ人」を制作しようとした。先行研究では、《サムソンとペリシテ人》の一連のブロンズ小像がミケランジェロの原案に基づいているという見解が大勢を占めている。バルジェッロ美術館 Inv. 286の《サムソンとペリシテ人》のブロンズ小像は、その造形と来歴の詳細な調査を行ったシュミットにより、同種の作例の原形であり、それゆえミケランジェロの原案に最も近いと考察されている。さらに1600年頃のこの種の彫像を表わした版画にミケランジェロの名が書き込まれている事実は重要である。また造形に関して、カーサ・ブオナローティ所蔵のミケランジェロによる他のモデルは、群像構成は明確に表現されているため、同じくモデルであった「サムソンとペリシテ人」もそれらと同様の完成度であった可能性が極めて高く、《サムソンとペリシテ人》の小像からミケランジェロの造形意図を読み取ることは十分可能である。

《サムソンとペリシテ人》が持つ造形に関して先行研究で言及されるのはほぼ多視点性に関するのみであるが、これらの作例がミケランジェロの原案を再現しているものとして評価するならば、《勝利》や《ヘラクレスとカクス》といった同時期の群像との比較を通じ、この時期の彼の群像彫刻における様式発展のなかに適切に位置付けることができる。構成する人物を2人から3人に増やし、ねじれを持たせた肉体を複雑に絡め合わせながら全体としてまとめあげる技量は、ミケランジェロの中で群像表現に関する意識が成熟していったことを示している。またラルソンが論じているように、どの面から見ても解剖学的に正確な丸彫り像であればそれだけで多視点性を有すると考えられていたルネサンス期において、彫像の周囲を巡るように観者の視線を誘導し、それによって新たな造形要素を発見させる《サムソンとペリシテ人》は、同時代の彫刻に類を見ないミケランジェロの先進的な発想を反映していると見なすことができる。このように視点に対する彼の意識は群像形式の発展とともに豊かになり、《サムソンとペリシテ人》において最終的にミケランジェロの表現は技巧の極致へと到達した。しかし、先鋭的な意識を持ちながらも、同時に古典主義的な肉体表現や安定したピラミッド構図などを採用し、決して技巧偏重に陥ってはいないということは注目すべきである。以上の考察により、ミケランジェロはこの一連の群像の造形的発展においてジャンボローニャの《サビニの女の略奪》を始めとするマニエリスム彫刻における多視点性の先駆となっただけではなく、ジャンボローニャなどの追随者が採用することのなかった、彼独自の多様で複合的な性質をも有していたと結論づけることができる。